

第7話
羽根の降る夜



時計の針が一時をまわっていた。

「あ、栄子ちゃん？」

〈入浴室〉の前に立った人影が声をかけてきて、間違ひなくハルカの声だったので、栄子は安心して歩み寄った。

栄子にとってハルカは唯一、心をひらいて話せる人だ。十一人の中でいちばん年長なのに、いい意味で、そう感じさせない。誰だれに対しても腰が低く、皆がやりたがらないことも率先して手本を示してきた。

〈入浴室〉の掃除もそのひとつだった。本来なら、当番制にして順繰りにすべきところを、なんとなくやむやになつて、いつのまにか、ハルカが一人で請け負っていた。

掃除は寮母さんがしているものと栄子は思い込んでいたが、寮母さんが足腰を痛めているのをハルカは知っていて、「風呂ふろの掃除は自分たちでや

りますから」と自分の判断でそう云^いったらしい。

二週間ほど前に栄子はそのことを知り、以来、時間を見はからっては〈入浴室〉の様子をうかがい、一人で掃除をしているハルカを見つけると、黙って手伝ってきた。

「いいよ、栄子ちゃん。明日、早いんだし」

「どうして、当番制にしないんですか」

「だって、わたしはお風呂にはいりませんから、って云う子が何人か出てくるでしょう？ そうなると、お風呂に一度もはいつていない子が掃除をすることになって——それもなんだかね」

「なるほど」

とはいえ、ハルカひとりが背負うこともない。

が、ハルカは自分が少しばかり我慢することで円満に事が運ぶならそれでいいと思っっているようだった。

いざこざや揉^もめごとが大の苦手で、誰かと誰かがいがみ合^あって云い争いになったりすると、「心底いたたまれない気持ちになる」という。

もっとも、風呂掃除にはハルカなりのひそかな

メリットもあった。垢あかでにごった浴槽を洗い、一旦たん、きれいにしたあと、もういちど新しい湯を入れて、独り占めに近いかたちでまっさらな湯を楽しむ。考えようによっては、とんでもなく贅ぜい沢たくなことだったが、毎晩、掃除をしているのだから、それくらいのご褒美は――、

「許されてもいいはずでしょう？」

ハルカは栄子にそうした秘密も打ち明けていた。「もちろんです」

栄子は少し憤って答える。

「誰も文句なんて云えません。こんなに汚しているんですから」

普段は身なりや仕草にまで気をつかっているのに、こういうものか、〈入浴室〉をきれいに使うという意識が著しく欠けていた。

これはしかし、各部屋に備わったシャワーだけでは物足りず、「もっと広い浴室で湯船につきりたい」と思った子たちが、揃そろいも揃そろって大雑把な性格であったことに起因していた。浴室の床は石せつ鹼けんやシャンプーの泡が飛び散り、使い終わったコ

ンデイシヨナーや入浴剤の小分けパックが無造作に捨てられたままだった。

もちろん、皆が皆そうしているわけではない。少なくとも「シャワー派」の中には——本当のところはわからないけれど——もう少し気をつかう子もいるはずだ。

栄子もハルカも基本的に「シャワー派」で、それでもたまには〈入浴室〉の湯船につきり、湯の中でゆうゆうと手足を伸ばす喜びも知っていた。

「よかったら、栄子ちゃん、このあとはいったら？ わたしは部屋でシャワーを浴びるから、もし、はいるなら、新しいお湯をためておくけど——」

「いいんですか、そんな贅沢」

「いいんじゃないかな？ お風呂についてはルールらしいルールもないし、明日は朝が早いから、みんな、さっさとお風呂を済ませて部屋に戻ったみたいだし。たぶんもう、みんな眠っちゃったでしょう」

それを聞いて、栄子はその気になった。

今夜は足を伸ばして湯につかう。

と云つても、たしかに足を伸ばして湯船につかることは可能なだけけれど、じつのところ、それほど大きな浴槽ではない。女性が一人ではいって少し余裕が出るくらいで、二人一緒には、まずはいけない。

それで、入浴希望者は、その都度、じゃんけんで順番を決め、代わる代わる一人ずつはいるというのが、なんとなくの決まりになっていた。

栄子はそうしたこともなんだか面倒で、この二週間、ほとんど湯につかることなく過ごしてきた。

「じゃあ、お言葉に甘えまして——」

「うん。最後のお掃除だけ、お願いしますね」

「わかりました」

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

脱衣所でハルカの足音が遠ざかっていくのを確かめ、すっかり聞こえなくなると、栄子はいまいちど廊下に出て耳を澄ました。

廊下のあかりは落ちている。

突き当たりにある非常口の表示が、緑色にほんやりと浮かんでいるだけだ。

〈入浴室〉のある二階には、他に食堂と寮母さんの部屋とレッスン・ルームがあった。が、寮母さんは週に一度の自宅へ帰る日に当たっていて、そうなると二階には誰もいない。

他の階からも耳に届く声や音もなく、寮全体がいつもより静まり返っていた。

もし、誰かが〈入浴室〉から聞こえる音に気づいても、こんな時間にお風呂にはいつているのはハルカさんに違いないと考える。そして、ハルカさんなら仕方がないと誰もがそう思うはずだ――。そこまで考えて、ようやく栄子は解放された気分になった。服を脱いで、まずはシャワーを浴び、それから本当にひさしぶりに長方形の湯船の中に首までつかった。ちょうどいい温度で、そうした塩梅あんばいの見事さも、ハルカさんならではの、と栄子はほとんど尊敬に近い思いを抱いていた。

大きく息をついて、浴室の天井を見上げる――。オーデイションに受かり、奇くしくも、十一人全

員が地方から東京に出てきた。その結果、こうしてひとつ屋根の下で暮らすことになったが、こんなに恵まれた環境はそうそうない。各人にワンルームとはいえ部屋が与えられ、三度の食事も広々とした食堂で——時間は決められているもの——十分に食えることができた。

「不満なんか云ったら、バチがあたります」

郷里の祖母がそう云っていた。

栄子は目を閉じる——。

祖母はひと月ほど前に、実家から数十キロ離れた大学病院で息を引きとった。引っ込み思案の栄子と違い、祖母は華があつて肝の据わつた人だった。オーディションに合格して東京に出てくる直前、台所で一緒に餃子ギョーザをつくっていたとき、

「あなただけに云っておくけどね」

祖母は声をひそめて告白した。

「わたしは若い時分、女優さんになりたかつたの」

祖母が体の不調を訴えたのは、栄子が東京に出て間もなくだった。母親が携帯に電話をしてきて、

「とにかく、もう長くはないみたい」と声を詰まらせた。すぐにでも帰郷したかったが、過密なスケジュール表をいくら睨にらんでも、時間がつくれそうになかった。

とうとう、死に目に会うことは出来ず、臨終の様子を母が電話で克明に話してくれた。なかなか頭にすんなりはいってこなかったが、ひとつだけ印象にのこったのは、祖母は息を引きとる前日、突然、「コーラが飲みたい」と云い出したという。そのあとすぐ昏睡こんすい状態におちいってしまったので、結局、願いは叶かなわなかったが、誰かが買いに走ったコーラの壘びんが枕もとに置かれていた。

「コーラって、あんなに黒い飲みものだったかしらね」

栄子の母は声を落としてそう云っていた。

*

「そうでしたか、それはそれは——」

前田まえだはそう云うと、ミツキに同情を寄せている

ことを示すためのなのか、情けないような悲しいような顔になった。

そのうえで――、

「シュツ」

と、前歯の隙間すきまからおかしな音を聞かせる。

「監督が駄目だって云った？」

「ええ。これはただのラジオペンチじゃないかって。まあ、たしかにその通りなんですけど――」

ミツキが舌を出して笑うと、そうか笑ってもいいのかとばかりに前田さんもつられて笑い出した。

「だけど、その――なんでしたっけ」

「ピーナッツ・クラッシュャーです」

「そう。そのそれだけどね、そんなものが、はたして本当に――シュツ――あるんだろうか」

「それが本当にあるみたいなんです。絵も描かいてくれて。監督が云うには、何十年前前に――まだ監督が助監督であった時代ですけど、この倉庫でそれを見つけて、撮影にも使ったそうです。わたし、その映画を試写室で確認したんですが――」

「出てきました？ その――それ」

「いえ。わたしが観たところ、どこにもそんなものは出てこなくて」

「じゃあ、夢でも見たんでしよう、監督は——」

「ええ、きつとそうです」

「しかし、困りましたね」

「ええ、困りました」

「こういうとき、本当なら、ミツキさんにおいしいお酒をつくって差し上げたいところなんだけど——」

そう云って前田さんは倉庫事務所の中に引っ込むと、中からあきららかに冷蔵庫を開け閉めする音が聞こえ、ミツキが（そんなもの、あったかしら）と訝いぶかる間もなく、前田さんは見るからに「きりきりに冷えたグラス」を手にして戻ってきた。

グラスは全体が白くけむって見えるくらい冷えていて、中は空だったが、それだけでもう、何やらおいしい酒の気配があった。

「こう見えて」と前田さんは心なしか背筋を伸ばし、顔の筋肉をきゅっと引き締める。

「私はその昔、銀座のちよつといい酒場でバーテ

ンダーをしていたんです」

「え、そうだったんですか」

「引き抜かれたんですよ——シュツ——こっちに」

前田さんが云う「こっち」とは、ミツキの名刺にも刷り込まれているこの映画会社を指していた。

「といっても、俳優としてではありません」

前田さんは苦笑し、

「ミツキさんは御存じないと思いますが、ひと昔前はいまの食堂の隣にラウンジがありまして、その隅の方に小さなバー・カウンターがあったんです。つくづく、いい時代だった。毎晩、お客さんがいらっしやって——シュツ——けっこう繁盛していましたね、皆さん、前田がここへ来てくれたおかげで、こっちからわざわざ銀座へ出向く必要がなくなっちゃって——」

「そうだったんですか」

「それで、そのとき、一番よく出たのがハイボールとコークハイ。ややつこしいお酒は準備できなかったの——」

「コークハイって、なんだか久しぶりに聞いた気がします。ウイスキーをコーラで割ったものですよね？」

「まあ、云ってみればそうなんだけど、そう聞くと、まるで子供じみた飲みものに聞こえるでしょう？　でも、私は——シュツ——思うに、コークハイこそ一番手ごろで一番おいしい飲みものだと思います」

前田さんは「酒」とは云わず、「飲みもの」と丁寧な口調でそう云い、前田さんがそう云うだけで、飲む前からおいしいような気がしてきた。

ミツキが思わず唇を舐めると、

「飲んでみます？」

前田さんは、いま一度、事務所の中の冷蔵庫の扉をあけ、これもまた凍りつく寸前まで冷やしたウイスキーの小瓶とコーラのレギュラー・ボトルを取り出してきた。

事務所の窓口のカウンターをバーのそれに見立て、

「秘密ですよ。こいつは自分用に冷蔵庫に隠して

いたものなんで——」

作り方は至ってシンプルだった。

先の冷えたグラスに氷を適当な大きさに砕いてたっぷり入れ、マドラーで氷だけを手早くかき混ぜる。グラスに口をつけると唇が切れてしまうのではないかというほど冷たくなったのを確認し、氷を捨てて、そこへ凍りつく寸前のとろりとしたウイスキーを適量注ぎ入れる。そして、そのちょうど倍の量のコーラを注いで、さっと合わせたら——。

「完成です」

前田さんはすっかりバーテンダーの物腰になっていた。

しかし、じつを云うとミツキは酒に強くない。ビールをコップに半分飲んだだけで顔が赤くなつて体中を血が走る。

拳匂、笑い出して饒舌じょうぜつになり、最後は顔が青くなって、「ちよつと横になります」と息も絶え絶えになる。だから、酒に対しては、よくよく注意深く接してきた。

が、前田さんの話を聞くうち、いまここで、この極上のコークハイを飲まなかったら、一生、後悔するんじゃないかと思えてきた。

実際、口にした途端、それは確信に変わり、こんなにおいしい「飲みもの」を飲まずに過ごしていた自分を悔やみ、偶然、こうして出会えた幸運、さらに云えば、これからも折に触れて必ず飲んでゆくことになるだろうという喜びに頭の中がくると一回転したような快感がよぎった。

「おいしい」

この世に「おいしい」という言葉があつてよかったとミツキは素直に思う。こんな便利な言葉があつたから、この得も云われぬ思いを言葉に置き換えることができた。

しかし、映画の美術に携わる者たちは度あるごとに唱えてきた。

「美しい、という言葉を安易に使うな」と。

「美しい」という言葉はいつからか記号になってしまい、そうした記号には、もうひとつ実感がこもらない。自分の思いや印象や感覚といったもの

が、すべて「美しい」という便利な記号に飲み込まれ、一番大事なところが抜け落ちてゆく。

だから、いやしくも「美術」を名乗る部署に身を置く者は、軽はずみに「美しい」などという言葉を使うものではない——かねがね先輩たちにそう諭されてきた。

しかし、ミツキの経験からすると、どれほど言葉を尽くしても伝えようのないものがこの世にはあった。云い方を変えれば、仮に気の利いた表現を思いついたとしても、それがかえってそのものを下世話なレベルに貶めおとしているような気がしてならない。

そういうときは、先輩諸氏の金言を無視し、心から思いを込めて、「美しい花」とか「美しい横顔」などとミツキは口にしてきた。

それとまったく同じ思いで、「おいしい」という言葉がこぼれ出た。

「あんまりおいしくて、頭がくらくらするくらいです」

ミツキの言葉に前田さんは、「そうでしょう」

と満足げに頷き、自分にも用意した同じ「飲みもの」を口にするなり、おや？ という顔になった。「たしかに」と、前田さんは首をかしげる。「なんだか、頭がくらくらしてきました」

「ええ。まるで、世界中が揺れているみたいですよ」

*

尾てい骨のあたりが最初の震動を感じたのと、湯の水面が一様に波打ち始めたのと、どちらが先だったろう。

「ん？」と声が出て、栄子は湯の中で力を抜いていた体を起こして天井を見た。それから、もういちど水面を見る。

あきらかに波打っていた。

と、次の瞬間、浴槽全体がバウンドしたような衝撃が走り、それからすぐに大きな横揺れが始まった。

一瞬、何が起きたのか判らず、浴室の窓が音を

たてて振動するのを見て、「地震だ」とようやく理解した。

大きい？

それほどでもない？

裸である無防備さで揺れの大きさを正しく判断できなかった。そもそも、栄子の暮らしていた郷里は地震が少ない。立ち上がるうとしているのに、うまくいかず、浴槽のへりにつかまって、湯が外へあふれ出るのを呆然と眺めていた。

おそらく、三十秒ほどだったと思われる。

栄子にはひどく長く感じられ、それはおそらく、揺れがおさまったあとも湯が大きく波打っていたせいだ。

とにかく、自分が無防備な状態にあるのをなんとかしたく、力をふりしぼって立ち上がると、よろけながら湯船から出て脱衣所に戻った。

それからどんなふうにも体を拭いて服を身につけたのかよく覚えていない。

いくつもの声が聞こえていた。

「大丈夫？」

「怪我はない？」

急いで脱衣所から廊下へ出ると、廊下は暗いままだったが食堂のあたりがついていて、吸い込まれるように食堂にはいつてゆくと、皆、そこに集まっていた。

「あ、栄子ちゃん、よかった」

ハルカが近づいてきて肩を寄せ合う。

「平気？」

「びっくりしました」

「ちよっと大きかったよね」

「お風呂の中だと最初わからなくて」

「そうか——髪が濡れてるよ」

ハルカは自分が首にさげていたタオルを栄子の頭の上ののせた。

そのタオル一枚のあたたかさを有り難く思いながら、栄子は食堂に集まった皆の顔を一人一人見ていった。

佐和ちゃん、瑞穂さん、奈々美さん——と確認

するたび、これまで経験したことのない安心感が胸の奥から溢れ出てくる。

「みんな、いる？」と誰かが声をあげ、

「いるみたい」と誰かが答えた。

栄子もそうだったが、お互いがお互いの顔をひとつひとつ見定め、ついでに頭数も勘定していた。

「よかった——」

「みんな、無事」

「大きかったよね」

「かなりじゃない？」

ほぼ全員がすでに就寝していたので、パジャマやスウェットを着て、すっぴんで髪はぼさぼさだった。

何人かは手をつないでいる。

初めて見る光景だった。

演技や体裁を取り繕うためではなく、心もとな
い思いの抛りどころとして、同じ船に乗り合わせ
た仲間の手を握っていた。

「もう揺れない？」

「わからないけど、余震っていうのがあるから

——」

「震度五だって」

誰かがスマートフォンで調べた情報を読み上げていた。

「震源は東京都二十三区——」

「やっぱり、東京って地震が多いんだね」

「こんなに大きいのは、わたし、初めて」

「こういうときって寮の警報機、鳴らないんだっけ？」

「あれは、火事の時だけじゃない？」

話しながら十一人は食堂のテーブルを取り囲んだ椅子いすに座り、めいめい深呼吸などすると、家族にメールを送ったり電話をかけたしたりした。

栄子も母にメールを送ったが、寝てしまったのか、返信は来ない。

「このくらいの地震、東京では普通なのかな？」

ハルカが立ち上がって、食堂の窓から外の様子をうかがった。

「なにこともなかったみたいだに静かだけど——」

「じゃあ、きつとそうなんだよ。これくらいの揺れは驚くことじゃないんだ」

「あやし、無理」

「わたしも無理」

「だって、棚に飾っていたバットマンのフィギュアが床に落ちちゃったんだよ？」

「え？ 咲ちゃん、バットマン好きなんだ？」

「そう。わたしのアイドル」

「本当？ わたしも同じ——」

食堂で、皆がこんなに活き活きと言葉を交わしているのは見たことがなかった。

栄子は〈東京03相談室〉のオペレーターのアドバイスを思い出した。

「話し合ったらいいんじゃないかしら——」

そう云っていた。それも、食堂にみんなが集まったときに話し合ったらいいと云っていた。

「ねえ——あの」

栄子が思いきって声をあげたとき、敏感な誰かが真っ先に「あっ」と反応し、すぐさま机と椅子と窓が音を立てて揺れ始めた。

「また？」

「余震じゃない？」

驚いたことに十一人の誰ひとりとして悲鳴をあ

げなかった。狼狽ろうばいすら見せない。息を呑むのような「はっ」という声はいくらか聞こえたが、皆、立ち上がることもなかった。

あたかも、あらかじめ台本が用意されていたかのように、全員が隣に座っている子の手を真っ先に握った。

皆が手をつなぎ、机を取り囲むひとつの円になった。

*

「ちょっと、待ってください」と前田さんは倉庫の天井を見上げ、「頭がくらくらするのはコークハイのせいじゃなくて地震のせいです」

冷静に正しく判断した。

「え？ そうなんですか？」

ミツキはなおさら酔いがまわりつつある。

前田さんは野生の本能に目覚めた動物のように身をひるがえすと、

「やや大きめです」

風を読むかの如く目を細めた。

〈小道具倉庫〉は二階建てだが、部分的に吹き抜けになっていて、解体された建造物の一部が、かなりの高さまで積み上げられていた。それらが崩れたらもちろん危険だし、そうでなくても、細々としたものでびっしり埋め尽くされているので、地震は天敵に等しい。

といて、対処しようがなかった。

前田さんとしては祈るより他なかったのだが、前から危ないな、と気になっていた一角が、案の定、崩れ出した。

崩れ出すと、あとはあつという間だ。

ドミノ倒しのように連鎖していくつかの棚が崩壊し、歴代の倉庫番が「雪崩なだれ」と呼んできた現象が、すさまじい音をたててひき起こされた。

これには、さすがにミツキの酔いも覚め、急いでコークハイのグラスをカウンターに置くと、舞い上がった埃ほこりが押し寄せてくるのに背を向けて目と鼻をかばった。それでも激しく咳せき込み、今度は口を押さえながら前田さんを見ると、前田さん

は頭髮のみならず睫毛^{まつげ}までもがパウダー状の埃をかぶって真っ白になっていた。

揺れはおさまったようである。

前田さんは咳き込みながらも果敢に立ちまわり、落としていた照明をつけようとしたが、スイッチがあるあたりも崩れ落ちたものに阻まれてままならない。

応急処置として、そのあたりに置いてあった撮影用スポットライトをつけ、「雪崩」が起きたあたりに向けると、光の筋の中に舞い上がった埃が雪のように降っているのが見えた。

「すごい埃」とミツキが鼻と口を押さえながらこもった声をあげる。

「いや、あれは埃じゃない」

前田さんがスポットライトを操作して、「ほら」と光で示した。

「スタントマンが使うセーフティ・マットが破裂したんです。羽毛ですよ」

小さな羽根が倉庫全体に舞い上がり、スローモーション映像のようにゆっくりと落ちてきた。

その羽根が降りそそぐ向こうに、スポットライトを浴びて鈍く光るものをミツキは目ざとく見つけ出した。

見覚えがある――。

「こんなものなんだけど」と監督がスケッチブックに描いたものによく似ていた。